

(別紙2)

## 英語教員 冬のスキルアップ

# 第51回北海道高等学校教育研究会(高教研) 英語部会研究集会のご案内

### 1 今年の英語部会

北海道高等学校教育研究会(高教研)英語部会は、年に一度、全道の高等学校英語教員が一堂に会し、研究と研修を深める場として発足し、今年で51回目を迎える歴史と伝統のある研究会です。この間、日本の英語教育界をリードする多くの方々からご講演をいただくとともに、全道で活躍されているたくさんの方々が素晴らしい研究発表を行い、北海道の英語教育において重要な役割を果たしてきました。

今回は、午前中の講演で東京外国語大学教授 根岸 雅史 先生をお迎えし、「CAN-DO リストの形での学習到達目標の作成」を演題に講演をいただきます。

午後からの分科会は2部構成とし、第1部・第2部それぞれ、全道各地の様々な規模・校種で活躍されている3名の先生方(合計6名)の発表いただきます。現在、各先生方は、日々の実践を鋭意まとめてくださっているところです。各分科会の中から興味のある研究発表を選んで参加することができます。

### 2 講師紹介

#### <午前中の全体講演>

講師：東京外国語大学 根岸 雅史 教授  
演題：「CAN-DO リストの形での学習到達目標の作成」



#### <主な研究発表(2010~2013年のものから抜粋)>

- ◆A validation study of the CEFR levels of phrasal verbs in the English Profile Wordlists(British Association for Applied Linguistics)
- ◆The development of the CEFR-J: Where we are, where we are going. WoLSEC International Symposium 2011
- ◆A progress report on the development of the CEFR-J. ALTE 4th International Conference
- ◆Can-Do リストは日本の英語教育に何をもたらすか/The Impact of the Can-Do Lists on English Language Teaching in Japan(文部科学省一ブリティッシュ・カウンシル 共催シンポジウム)
- ◆Can Do ベースの新しい英語能力到達度指標 CEFR-J-開発の経緯と活用のヒント(第38回全国英語教育学会)
- ◆Slow and Steady?: An interim report of the analysis of the spoken and written language of the A1 EFL learners in Japan. (English Profile Seminar No.14)

#### <主な論文・著書(2010~2013年のものから抜粋)>

- ◆『英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』(大修館書店・分担執筆 2013年)
- ◆「CEFRに基づくリスニング・レベルの基準特性を探る」(ARCLE REVIEW. No.4 2010年)
- ◆「CEFR 基準特性に基づくチェックリスト方式による英作文の採点可能性」(ARCLE REVIEW. No.6 2012年)

- ◆ 「GTEC for STUDENTS 推奨スコアガイドライン」(ベネッセコーポレーション・共著 2011年)
- ◆ 「New Crown English Series New Edition 1～3 (文部科学省検定済教科書)」(三省堂・共編著 2011年)
- ◆ A progress report on the development of the CEFR-J. (Cambridge University Press 共著 2011年).

<東京外語大学ホームページより(自己紹介)>

私の研究領域は、英語教育です。なかでも、言語テストとリーディングを専門領域としています。言語テスト研究では、外国語としての英語(EFL)のテストの妥当性の検証を行うとともに、実際のテスト開発にも数多く関わっています。また、リーディング研究では、L2リーディングのプロセスと能力構造について興味を持って研究を行っています。さらに、教科書などの学習教材の作成も行ってきています。

専修専門の講義では、英語教育の指導と評価及び4技能のメカニズムなどについて講義を行っています。また、演習では、英語教育における「評価とテスト」について授業を行っています。演習は、例年30名ほどの大所帯ですが、大学院生も参加してくれており、学部生のいい刺激になっているようです。

また、サッカー好きが高じて、サッカー関連の原稿も時折執筆しています。

<「生徒の『英語』、教師の『英語』－ギャップの実態に迫る－」※より>

1) コミュニケーションの実感を

まずは、教師も生徒も意識として、英語とは生身の人間が日々使っている現実の言葉であるという認識を持つことが大切ではないか。そして、授業の中では、この認識に基づいた言語活動を展開するとともに、英語と生徒自身の関わりについて、テストや入試以外の関わりを常に意識させることが必要となる。

2) 使えるようにするための大量の練習を

次に、英語の習得に当たっては、使えるようにするための大量の練習が必要であるという認識を教師と生徒が共有することが重要である。「テストや入試」「文法」といったものから連想される知識は、いわゆる「宣言的知識 (declarative knowledge)」と言われるもので、ルールなどを明示的に言葉で説明できるような知識のことである。しかしながら、英語を実際に使いこなすには、これらの知識は自動化され、意味に焦点を当てながら半ば無意識のうちに使えるようにならなければならない。このための大量の練習は、どの技能であっても、着実にそして継続的になされなければならない。

3) コミュニケーション能力を測るテストを

今回の調査で目についたのは、「英語」のテスト(入試も含め)が実際のコミュニケーションとまったく別ものにとらえられている点である。もしこれが事実であるとする、本来の授業で目指すものとテストで評価されるものが異なっていることになる。このままでは、いくら教師や生徒が「英語」の学習に時間をかけても、結局は「使えない英語」を身につけるだけで終わってしまう。テストをコミュニケーションにすることで、「テストへ向けた学習」が「コミュニケーション能力を高める学習」につながるようにすることが必要である。

※ベネッセ教育総合研究所 2007年 根岸教授他編

多くの皆さまの参加をお待ちしています！